

検証・浦和電車区事件の真実 No.10

民主化闘争情報 [号外] 2008年4月28日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合)

第10回 絶望的になり会社に相談

2001年1月21日、勤務終了後に1時間半にわたってJR東労組役員らから集団で吊し上げを受けたY氏(当該事件被害者)は、このような状態ではとても仕事を続けられないと絶望的になった。帰宅したY氏は、動揺が治まらないまま、とにかく会社に相談しようと職場(浦和電車区)に電話を掛けた。当直の責任者であったJ助役が電話に出た。

このままでは勤務できない、なんとかしてほしい!

Y氏は、「今日、東労組組合員に取り囲まれ『会社を辞めろ』などと恫喝された。今の精神状態では事故を起こしかねない。親にも会社を辞めたいと相談した。同じことを続けられたら会社を辞めざるを得ない。このままでは勤務を続けられない。なんとかしてもらえないか」と話した。J助役は「急に辞めると言われても困る。I区長とよく相談してみてはどうか。区長に伝えておく」とY氏を慰留した。しかし、とても電車の運転ができる自信がなかったので、「翌日から年休を取って休みたい」と申し込んだ。Y氏は、会社にJR東労組との間に入ってもらい、組合の脅しやイジメを止めさせてもらうしかないと思った。

1月22日の夕方、浦和電車区のK副区長からY氏の自宅に電話があった。Y氏は改めて集団で吊し上げを受けた事情を話し、「このままでは勤務を続けられない。なんとかしてほしい」と訴え、翌日、職場の区長室で相談することとなった。

区長、副区長に会社に残れるよう懇願

Y氏は、1月23日の18時に浦和電車区区長室に出向き、I区長とK副区長に本心を打ち明け、助けてもらいたいと懇願した。「21日に東労組組合員に囲まれて『会社を辞めて責任を取れ!』『辞めるまで嫌がらせを続ける!』などと罵声を浴び、身の危険を感じた。精神的に参ってしまい、今の状態では運転にも不安がある。彼らに遭うたびにやられると思うと、不安で事故を起こす危険がある」と事情を説明し、「組合との関係を修復して会社に残りたい。できることなら転勤させてほしい」と申し出た。

I区長は、「組合のことで嫌がらせを受けたり、追及されたりすることはよくあることから、もう少し我慢しろ。もう少し様子をみよう」と言い、K副区長は「組合の掲示板でY君のことはだいたい知っていたが、組合のことなので、敢えて口出ししなかった」と話した。さらにI区長は、「支社ともよく相談してみる。分会長の上原(被告)にも伝える」と述べた。Y氏は、会社に残りたい一心で必死だった。上原分会長にも何度か電話したが、「今は会えない」と言われた。

Y氏は目の前が真っ暗になり、自宅でひどく落ち込んでいた。両親も心配し励ましてくれたが、これからいったいどうなるのか、不安でたまらなかった。なぜこんな目に遭わなければならないのか、悔しくて、納得できなかった。(次号に続く)